

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652029

研究課題名(和文) 19世紀英国と明治日本における中世主義とジャポニズムーラファエル前派芸術の展開

研究課題名(英文) Medievalism and Japonisme in Victorian England and Japan in the Meiji Period: The Art of the Pre-Raphaelites

研究代表者

山口 恵里子 (YAMAGUCHI, Eriko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20292493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：中世主義の建築家・デザイナーは、1862年ロンドン万国博覧会展示された日本の装飾芸術をヨーロッパ中世の芸術に重ね、兄弟団の設立メンバーだったD. G. ロセッティも博覧会後に日本の浮世絵や品を収集しはじめた。日本のモノへの熱狂(日本趣味)は1890年代に最高潮に達する。その頃、明治の日本でラファエル前派が熱狂的に受容され、彼らが表した中世的世界が称えられた。この熱狂は、1890年代の日本古来の伝統への回帰を唱える動きと、1900年代の明治浪漫主義と運動し、芸術の分野では日本の伝統的な装飾性の再生が目指された。ラファエル前派芸術と明治芸術を結んだのは、中世主義と装飾への傾倒だった。

研究成果の概要(英文)：The 1862 International Exhibition in London triggered the cult for things Japanese, Japonisme. Architects and designers, who advocated medievalism, found the affinity between European medieval art and Japanese artefacts. D. G. Rossetti, who had founded the Pre-Raphaelite Brotherhood with six artists in 1848, began to collect Japanese ukiyoe and things. The cult for things Japanese reached its climax in the 1890s. Japanese literati and artists were fascinated by the Pre-Raphaelite medievalism under "Japan for the Japanese" movement in the 1890s and a trend of art for art's sake in the 1900s. Artists such as Takeji Fujishima and Shigeru Aoki were much influenced by the Pre-Raphaelite decorativeness in their own medievalism and aestheticism to produce modern Japanese decorative painting. The decorativeness is a quality which bridged between Victorian cult for something Japanese and Japanese cult for the Pre-Raphaelites.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：中世主義 ジャポニズム ラファエル前派 装飾芸術 明治の文学・芸術 明治浪漫主義 芸術接触

1. 研究開始当初の背景

(1)ラファエル前派兄弟団はラファエッロ以前の芸術に回帰することを目的にして結成されたが、それは当時高まりをみせていた中世主義(medievalism)の影響を受けたものでもある。その関わりについては、これまでも研究が積み重ねられてきた。

(2)一方、イギリスのジャポニズム研究も進められてきたが、中世主義とジャポニズムの接点はほとんどふれられてこなかった。

(3)また明治日本の芸術家・文学者がラファエル前派の芸術・文学を受容したことも論じられており、本研究の代表者(山口)も明治以降のラファエル前派関係の展覧会と雑誌特集号のデータを発表している。

これまで別個に研究がなされてきたこれらの研究を統合する本研究は、ラファエル前派芸術および明治近代芸術の新たな側面を開くものとなる。

2. 研究の目的

ラファエル前派兄弟団の一人、D. G. ロセッティと彼の周辺の芸術家はイギリス中世の文学・芸術に取材しつつ、日本の芸術の影響を受けようになった。一方、近代化、西洋化を推進する明治日本ではラファエル前派文学・芸術が熱狂的に迎えられた。そのなかで「日本人のための日本」運動が起こると、ラファエル前派の中世に傾倒した文学・芸術が「真正の日本」に回帰するための指針ともなった。ラファエル前派と、彼らの影響を受けた日本の芸術の相互関係を検証し、いかに「中世」と「日本」が19世紀イギリスと明治日本の芸術を結ぶ媒体として作用したのかを追跡することを本研究の目的とする。

3. 研究の方法

(1)19世紀イギリスにおける中世主義とジャポニズムに関する評論、言説、雑誌記事、著作等の収集調査(ヴィクトリア&アルバート博物館、ナショナル・アート・ライブラリー、

フィッツウィリアム美術館、イェール大学イギリス美術センター等での調査研究)

(2)ラファエル前派の中世主義およびジャポニズムの影響をうけた具体的な作品の調査

(3)明治日本におけるラファエル前派に関する評論、言説、雑誌記事、著作(翻訳も含む)の文献調査、およびデータベース化。ブリティッシュ・スクール(ローマ)における、イタリアのラファエル前派受容との比較研究。

(4)ラファエル前派の中世主義の影響を受けた明治の作家・芸術家の作品分析

(5)明治日本の「日本人のための日本」運動で用いられたラファエル前派関連の言説および作品の調査分析

(6)上記の調査で得られたデータを分析し、総括する。

4. 研究成果

(1)ラファエル前派の中世主義に関して：

ラファエル前派兄弟団が1848年に結成されるまでの背景を追跡した(雑誌論文)。兄弟団設立の中心的なメンバーだったD. G. ロセッティ、W. H. ハント、J. E. ミレイは、兄弟団結成前に芸術家仲間が集まる様々な「クラブ」に参加していた。兄弟団もそのような協働的活動の一つとして結成された。彼らの協働性は、中世的な芸術実践の再生の試みである一方で、芸術規範に対抗するための前衛的な試みであり、近代の資本市場に参入するための試みでもあった。彼らの中世主義は、「理想」を追求する指針だけでなく、制作を続けるための現実的な手段でもあったのである。この中世主義の「近代性」は、ロセッティが描いた中世的主題の作品においては「装飾」への傾倒として現れることになる。この点について、鹿児島市立美術館の講演会で、展覧会の展示作品に即して講演した。(学会発表)

(2)装飾的傾倒に関して：

さらに、2011年8月～11月にはイエール大学イギリス美術センターの研究者（Visiting Scholar）として、「D. G. ロセッティの装飾的デザインにおける中世主義」の研究を遂行した。イギリス美術センターが所蔵する貴重な絵画作品と文献を調査研究し、ロセッティの作品研究を行った他、1851年ロンドン万国博覧会「中世部門」および1862年ロンドン万国博覧会「日本部門」に関する言説の収集を行い、その間の10年間における中世主義の変容の過程を辿り、1862年のロンドン万国博覧会で中世主義の建築家やデザイナーが日本の展示品（日用品・装飾芸術）にヨーロッパ中世の芸術との親縁性や中世のクラフツマンシップを見いだした背景を研究した。その成果は、図書、学会発表、雑誌論文で発表した。

(3)日本の装飾芸術への熱狂とジャポニズム

ラファエル前派と交流があった建築家・デザイナーのW. パージズは1862年の万博以前から日本の品を収集し始めていた。彼もまた万博に展示された日本の品に、ヨーロッパ中世の芸術を重ねた一人だった。パージズは万博の中世会場に、中世の絵付け家具を参照してデザインしたサイドボードを出品したが、その装飾に、すでに日本の本の包み紙や意匠を用いていたと思われる。ロセッティも万博後に日本の浮世絵やモノを収集し始める。彼は日本の武者絵のデザインに驚嘆し、武者絵に描かれた鎧を中世のアーサー王物語の騎士を描いた自身の作品に応用した。これらの発見については、図書で論じた。

(4)明治日本の文学者と芸術家のラファエル前派の中世主義作品の受容

1862年の万博は日本のモノに対する熱狂、いわゆる「日本趣味」を引き起こし、その熱狂は1890年代に最高潮に達する。同じ1890年代に日本では文学者や芸術家のあいだでラファエル前派への熱狂が起きた。ラファエル前派への最も早い言及は、1896（明治29）

年、上田敏が『江湖文學』11月号に書いた「英國近代の詩歌」にみられる。上田敏は、ラファエル前派の開祖としてロセッティを挙げ、ロセッティ作品を中世的世界に結びつけた。同年、上田敏は、島崎藤村や戸川秋骨らが1893年に創刊した雑誌『文學界』第49号に「ロセッチの詩歌」を発表する。上田敏が示した中世、ダンテ、ロセッティという繋がりがその後の明治におけるラファエル前派受容に大きな影響を与えることになった。

1900年代に入ると、芸術の分野からもラファエル前派への言及が始まった。その最初期の言及の一つが、白馬會絵画研究所主催の「美術講話」という講演のなかで岩村透が話した「ブレラフェリストの起源」である。「美術講話」では黒田清輝による講演もあった。上田敏は、この黒田清輝の講演について、1902年2月に『藝苑』創刊号で言及した文章（『美術講話』を読む）のなかで、「ラファエル前派」と記した。この上田敏の訳語が一つのきっかけとなり、「ラファエル前派」という呼称が日本で広まったと考えられる。

(6)ラファエル前派と「日本人のための日本」運動

1890年代からラファエル前派への熱狂が起きた背景として、イギリスの産業革命後の不安を近代化がすすむ日本の芸術家も感じていたこと、新しい恋愛観によって愛の詩が好まれたこと、英語の学習熱が高まったことなどが指摘されている。また同時期に花開いた明治浪漫主義がラファエル前派受容の土壌になったことも論じられてきたが、1890年代は国粹保存主義の時代であったことも重要である。鹿鳴館外交に象徴される西欧文化の模倣は1880年代に頂点に達したが、こうした西洋化が「本来の日本の価値観と伝統への回帰」を求める動きをもたらした。反西洋家運動を唱える芸術家がモデルとしたのが、ラファエル前派の中世主義だった。このラファエル前派の中世主義への関心にも、上田敏

による紹介の影響が強い。

ロセッティがイタリア中世の詩人ダンテの影響を受けて書いた詩「祝福されし乙女」(1847-80)は、中世的な世界が称えられた。戸沢姑射は、『明星』に掲載した「祝福されし乙女」の解説で、詩の中世的世界を解説しながら、明治の読者の目を日本古来の文化にも向けさせていった。

上田敏をはじめとしてロセッティをダンテの翻訳者として迎えたことも、明治の読者がロセッティの中世的世界に憧れたことを示している。ダンテのベアトリーチェに対する愛は、新しい女性観・新しい恋愛観として、明治の若者の感情に訴えたのである。

他方、明治 30 年代の画壇をリードした白馬會の画家もラファエル前派の中世的世界を描いた作品から影響を受けた。明治 20 年代後半から 30 年代初めにかけて創刊された『文學界』『明星』等が牽引した芸術至上主義的な傾向、そしてその動きが生んだいわゆる明治浪漫主義のなかで、画家たちはラファエル前派の作品に新しい芸術を探したのだ。藤島武二、青木繁らは、ラファエル前派の中世的作品を参考にして、平安時代を主題にした作品を描いた。ラファエル前派の中世主義は、ロセッティを中心としたラファエル前派第二世代の唯美主義的な絵画と並行して、明治浪漫主義の時代を彩っていく。こうした日本古来の文化への回帰とラファエル前派受容の並走は、「日本的洋画」を誕生させた。ヨーロッパ化と日本文化への回帰という二つの方向性が重なったところに日本的洋画が生まれたのだが、ラファエル前派の中世主義的絵画こそが、この交差点をもたらしたといえる。ヨーロッパ化と日本古来の文化への回帰という逆方向に向かうベクトルを重ねることができたのは、ラファエル前派第二世代の作品の「装飾性」だった。藤島、青木らはこの装飾性を再生しようとした。夏目漱石も装飾を結び目として、イギリスの中世主義

(ラファエル前派)と自己の「中世/日本」とのあいだに同様な感受性を感じていた。

(7)1920年代のリバイバル

ロマンティズムに代わって自然主義が台頭すると、明治の芸術家によるラファエル前派への熱は冷め、島村抱月が1908年に『早稲田文學』に寄稿した「文芸上の自然主義」は明治時代に書かれた最後の文献の一点となった。その後、ラファエル前派熱は、大正14(1925)年刊行の小日向定次郎による『ダンテ・ロセッティの研究』と渡邊康夫による翻訳『ロゼッチ詩集』がきっかけとなって再燃する。ロセッティ生誕100年にあたる1928年、ロセッティの実際の絵が少なくとも2回の展覧会で展示され、また『英語研究』、*The Muse*、『文藝研究』、*Panthéon*等の雑誌がロセッティ特集号を組む。これらの特集号では、ロセッティのモデルであり、妻となったエリザベス・シダルへの言及が溢れ出す。明治の文献では、ロセッティの訳を通してダンテのベアトリーチェへの愛がとりあげられたが、1920年代にはシダルがラファエル前派のイコンとなり、シダルの悲劇はロセッティを苦悩する詩人としてみる見方を助長し、唯美主義研究へと接ぎ木されることとなった。ラファエル前派の日本における受容については、学会発表、図書で発表した。

(8)日本におけるラファエル前派研究の書誌

明治から現在までの日本におけるラファエル前派研究の書誌を作成し、「ラファエル前派展」(テート美術館、朝日新聞社、森アーツセンター、テレビ朝日主催、森アーツセンターギャラリー、2014年1月25日～4月6日)のカタログに掲載した。同展のカタログ用に、作家解説とラファエル前派関連年表を作成した。

(図書)

(9)ローマのプリティッシュ・スクール、イギリスの美術館・図書館、イェール大学イギリス美術センター等では、19世紀イタリアのラファエル前派受容についての調査研究を行っ

た。イタリア人画家ジョヴァンニ・コスタの周辺に集まったイギリス人画家のグループ「エトラスカンズ」がイタリアでは「ラファエル前派」の影響を受けた芸術家として受容されていた。「エトラスカンズ」が目指したセンチメントの表現としての風景画の「ラファエル前派的」世界は、日本におけるラファエル前派の装飾的な中世的世界とは異質である。ラファエル前派（主義）は国境を越えて、地域ごとに多様に受容されている。このラファエル前派主義の国際的な多様な広がりを今後検討する必要がある。この研究成果は学会発表 で発表した。

(10)国際ワークショップ・シンポジウムの主宰(2014年1月25・26日)(学会発表)

研究者を対象にしたワークショップ「ラファエル前派主義と唯美主義」を主宰(於筑波大学東京キャンパス) 発表者(英語による): アリソン・スミス(テート・ブリテン)「ラファエル前派のテクニク」、小野文子(信州大学)「ホイッスラー、ジャポニズム、日本」、大石和欣(東京大学)「ロマン主義、ラファエル前派、日本」、川端康雄(日本女子大学)「1930年代のラスキン、モリス、日本」、ティム・バリンジャー(イエール大学)「政治とラファエル前派」、ジェイソン・ローゼンフェルド(メアリマウント・マンハッタン・カレッジ)「ラファエル前派とポップ・カルチャー」

公開シンポジウム「2014ラファエル前派展記念シンポジウム」を主宰(於法政大学) 発表者(同時通訳): アリソン・スミス「ラファエル前派展の開催—過去・現在・未来」、山口恵里子「日本のモダニズムとラファエル前派—1890年代から1920年代」、荒川裕子(法政大学)「日本におけるラファエル前派の再受容」、ティム・バリンジャー「ラファエル前派と政治」、ジェイソン・ローゼンフェルド「ラファエル前派とポップ・カルチャー」

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

山口恵里子: 「PRB誕生前夜から「結成」まで」『美術手帖』増刊 特集: イギリスの美術革命 ラファエル前派、査読なし、2014、pp. 61-71.

山口恵里子: 「D. G. ロセッティの装飾的中世—《エルフェン・ミアの乙女たち》とモクソン版『テニソン詩集』への挿絵から」『文化交流研究』(筑波大学)査読なし、第8号、2013、pp. 65-117.

[学会発表](計8件)

山口恵里子「ロンドン—アーツ・アンド・クラフツ運動の源流」(講演)(如水会一橋フォーラム、2014年2月12日)如水会館

山口恵里子「日本のモダニズムとラファエル前派—1890年代から1920年代」国際シンポジウム「2014ラファエル前派展記念シンポジウム」(2014年1月26日)法政大学

YAMAGUCHI, Eriko: “Pre-Raphaelite Medievalism in Japan: Decorativeness in Art and Literature in Meiji Romanticism.” Workshop: “Internationalised Pre-Raphaelitism.” (2013年1月10日)Paul Mellon Centre for Studies in British Art, London (イギリス)

山口恵里子: 「ローマのカンパーニャとイギリス風景画—ターナーからエトラスカンズへ」美術史学会東支部例会(2012年1月28日)東京藝術大学

山口恵里子: 「ラファエル前派のファッションと明治芸術」ファッション文化研究会(2011年12月17日)筑波大学

YAMAGUCHI, Eriko: “Pre-Raphaelite Medievalism and Materialism: D. G. Rossetti, Edward Burne-Jones, and William Morris.” The Nineteenth-Century Art and

Visual Culture Colloquium. (2011年10月4日). Yale University (アメリカ合衆国)
YAMAGUCHI, Eriko: “D. G. Rossetti's Medievalism: His Preference for Decorativeness.” “Art in Context” at Yale Center for British Art (2011年9月13日). Yale Center for British Art (アメリカ合衆国)

山口恵里子: 「ラファエル前派の芸術と装飾 ロセッティ、バーン＝ジョーンズ、ウィリアム・モリスを中心に」特別企画展「ラファエル前派からウィリアム・モリスへ」記念講演会(招待講演) (2011年8月7日) 鹿児島市立美術館

[図書] (計2件)

山口恵里子編: 「作家解説、ラファエル前派関連年表、参考文献」『テート美術館の至宝ラファエル前派展—英国ヴィクトリア朝絵画の夢』朝日新聞社、2014、pp.194-99、pp. 202-15.

山口恵里子: 「英国ヴィクトリア朝の日本趣味と明治芸術のラファエル前派受容—中世主義と装飾芸術を結び目として」松村昌家編『日本とヴィクトリア朝英国—交流のかたち』大阪:大阪教育図書、2012、pp. 45-107.

[その他]

朝日新聞社発行「額絵」においてラファエル前派作品を解説。2013年6月～2014年6月

6. 研究組織

(1)研究代表者

山口 恵里子(YAMAGUCHI, Eriko)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号: 20292493